

# 長田須磨が描いた明治時代の奄美の衣生活文化

## －芭蕉布から木綿へ－

多々良 尊子

### 1. はじめに

長田須磨著『わが奄美』に次のような一節がある。鹿児島県大島郡大和村の言葉で語られた習俗を解説した短い文であるが、芭蕉布の美しさや稀少性だけでなく、薩摩藩による支配のもとで木綿<sup>注1</sup>が芭蕉より高価だったこと、その価値が明治時代に大きく変わったことがわかる。

「バショウは、南方が故郷であろう。いつどうして奄美にたどりついたか定かでないが、奄美が北限であるので生バショウ<sup>注2</sup>などの美しさは生糸をしのぐ。生バショウの繊維をとるのはむずかしい。沖縄は奄美より南端なので、この生バショウの繊維は粗く、奄美が卓越しているので、琉球王室、薩摩藩に上納を命じられていた。奄美の衣生活は、木綿が入るまで、これで支えられていた。木綿が入っても高価で、一般の人は着用できなかった。文政元年生の曾祖母が、母に高価な木綿糸を使わずに、バショウを使えと言ひ、母が今は木綿が安くなったことを説明していたのは明治四十年過ぎであった。」<sup>1)</sup>

現在では、芭蕉布と言えば沖縄特産の織物とされることが多い。しかし、明治時代までは奄美群島でも衣服材料として広く用いられていた。品質の良い芭蕉糸がとれ、材料として沖縄に移出されていた。しかし、明治中期以降、庶民の衣服は芭蕉から木綿へと急速に変化していった。外国産の安価な綿花が大量に輸入されるようになった一方で、紬織業が発展し、大きな収入源となっていたことが要因であろう。

芭蕉布の生産工程は、機械化することができないため、今でもほぼ手作業によっている。着尺地一反に半年を費やし、販売価格にすると数百万円にもなる。しかし、手間がただであるとみなされていた時代には、手間のかかる芭蕉布は決して高価なものではなかった。糸を績み、機を織る技術を身につけ、勤勉に手仕事を重ねることにより等しく手に入れられるものであった。明治政府の殖産興業政策と大島紬の興隆が、奄美の芭蕉布を衰退させ、何世紀にもわたって自給自足を基本としてきた庶民の衣生活文化の価値観を一転させる端緒となったと考えられる。

本報では、奄美大島内の民俗資料館等に収蔵されている着物の調査および市町村誌などの資料をもとに、長田須磨の民俗研究における衣生活文化についての論述を裏付け、奄美の庶民の衣服が、芭蕉から木綿へ置き換わっていった過程を考察したい。

### 2. 長田須磨『わが奄美』

長田須磨（おさだ すま）さんは、1902（明治35）年大島郡大和村に生まれた。生家は、

注1：繊維の名称としては「綿（めん）」と表記するのが標準であるが、「綿（わた）」と混同しやすいため、本稿では「木綿（もめん）」を用いる。

注2：芭蕉の繊維は、糸芭蕉の葉柄を灰汁で煮て、繊維以外の成分を膨潤させて取り出す。それに対して、葉柄の内側の上質な繊維を煮沸することなく、生のままとしたものを生芭蕉という。現在では、経緯とも上質の細い芭蕉糸を用いた織物を生芭蕉と称することもある。

曾祖母が親ノロ（琉球・奄美諸島の信仰における女性司祭）をつとめる旧家であった。名瀬村立実科高等女学校から東京の共立女子専門学校に進んだが、病気により中退した。大阪樟蔭高等女学校の助手などを経て、1930（昭和5）年に旧制中学の教員であった長田広さんと結婚した。戦後の混乱が収まりかけた1950（昭和25）年頃より、柳田國男の『南海小記』<sup>2)</sup>に触発され、奄美の民俗研究に取り組み始める。その成果は、『奄美女性誌』<sup>3)</sup>、『奄美方言分類辞典』<sup>4)</sup>、『奄美の生活とむかし話』<sup>5)</sup>、『長田須磨の奄美の民話と昔がたり－奄美大島大和浜方言の記録－』<sup>6)</sup>などにまとめられた。1998年に逝去された。

『わが奄美』は、『奄美郷土研究会報』（1958年1号～2011年42号）や『えとのす』（新日本教育図書による民俗学・考古学の雑誌、1974年～1987年）などに発表された原稿をまとめて没後に出版されたものである。精力的な研究の成果と幼い頃の経験が相まって、奄美の方言、昔話、生活習慣、信仰など幅広い内容が生き生きと表現されている。大学等の研究機関に籍を置くことはなかったが、奄美方言の言語学的解析に貢献した功績は高く評価されるものである。染色や織物など衣生活にかかわる著述も多い。

2003年大和村中央公民館（写真1）の一室に、長田須磨文庫（写真2）が開設された。奄美方言を口述したテープ、研究ノート、手書きの図や原稿など貴重な資料が収められている。同館には、2006年に鹿児島県から有形民俗文化財として指定されたノロ関係資料である玉ハベラ、首飾り、龍繡胴衣（りゅうしゅうどぎん）など<sup>7)</sup>も収蔵されている。その他、村内の民俗資料を集めた資料展示室も公開されている。



写真1 大和村中央公民館



写真2 大和村中央公民館内「長田須磨文庫」

### 3. 木綿の普及

綿花栽培は江戸時代初期に全国的に広まった。庶民の衣生活を一変させただけでなく、農村経済の変革をもたらしたと言われている。木綿が普及する以前の衣服材料は、絹と麻が主であり、地域によって藤、葛、芭蕉、科などの植物繊維も利用されていた。絹は、柔らかく暖かく軽く、何よりも美しい光沢があるが、一握りの上流階級のものであった。麻は非常に丈夫で庶民の作業着に適してはいたが、糸を採るのに非常に手間がかかり、わざわざ保温性に欠けている。

それに対して、木綿は、柔らかく保温性があり、染色性も良く、苧麻の1/10の労力で織物に出来る<sup>8)</sup>と言われていた。そのため、庶民の衣服材料として急速に広まっていった。天保年間に著された類書である『守貞謾稿』巻之十九・染織には、木綿について次のように記されている。

「又前ニ云如ク、文禄以前ハ木綿ハ無レ之。帛ヲ用ヒザル者ハ、冬服ニモ麻布ニ綿ヲ入テ着セシ也。今ハ、夏服ニ非レバ麻布ヲ用ヒズ。木綿ノ價ハ廉ニシテ、帛ヨリ暖ニ、又久シク堪ル。実ニ民間ノ至宝也。」<sup>9)</sup>

ここで、綿は絹の真綿、帛は絹織物を指している。木綿について、安価で、暖かく、丈夫であることから、広く普及し、庶民の衣生活に大きく貢献していると称賛している。また、江戸時代の経済学者・佐藤信淵による『経済要録』巻之九、衣服第七の一段目には、衣服の起源から木綿の普及までが次のようにまとめられている。

「国土開闢の初には、人皆衣服を製することを知らずして、秋より翌春迄の間は、或は草木の葉を採って身体を被包し、或は鳥獸の羽及び皮を剥き、此れを服に以て風寒を凌ぎ、夏日暑熱甚しき時は、唯裸体にて月日を送れるのみ、其後多年を経るの間に、神聖天より降誕して桑麻を作り、蚕を養ふことを教しより、始て絲を採り、布帛を織りて衣裳を製すること知れり、又其後世界漸々文明になりて、綾羅錦繡の華美を極るに至れり、然れども天正・文禄頃までは、富貴なる人は絹布を著するが故に、軽暖なりと雖も、貧賤なる者は皆麻布を以て製したる刺兒を衣て嚴寒を凌ぎしを以て、頗る難渋なりしこと、思はれ、其頃は毎年春暖を催せる時分より夏の半頃に至て、疫熱大に流行し、下賤の者或は此大患に罹り、死亡なせる者幾千万人と云ふことを知らずと諸記録に見えたり、(中略)然るに草綿種子の世に出るに及で、卑賤なる下民と雖も、綿布の温袍を著するときは、寒氣極めて栗烈たりとも、此に傷るゝの患ひあることなし、此に由って之を觀れば、草綿は實に下民等が身体を保全すべきの至宝にして、欣戴す可きの最上なり、夫衣服の人生に於ける、其緊要なること食物に伯仲せり、詩云、無レ衣無レ褐、何以卒レ歳と、故に国家に長けたる者は能く務て調絲・機織の業を弘めよ、一婦織らざる者あれば、一人必ず寒氣に因しむものあるは論を俟ざる也、可レ不レ勤哉。」<sup>10)</sup>

木綿は、冬の寒さから庶民の身を守っただけでなく、商品作物としての側面も大きかった。農家が努力して生産性を上げることにより、収益が得られた。天保年間には、綿作の収入は稲作の2倍以上<sup>11)</sup>であったとされている。また、織物としてだけでなく、生産段階ごとに、実綿、繰綿、篠卷、総糸<sup>注3)</sup>として流通していた。綿花はもともと熱帯の植物であり、栽培に適さない地域もあった。しかし、繰綿や総糸の流通により、それを購入して染色・製織することで銘柄木綿の産地が全国的に存在した。実綿と織物の価格差は1.7～2.5倍あり、加工(手間)により付加価値が生じた。「取替木綿」<sup>12)</sup>という言葉があるように、綿屋から預かった繰綿を紡ぎ、白生地を織り上げると、元の繰綿の何倍かと交換してもらえた。工賃分の繰綿で家族の着物を賄ったり、綿入れや冬用の厚手の織物を作ることができた。

このように、木綿は、本土では江戸時代に庶民の衣服材料として普及した。しかし、奄美では明治初めまでほとんどが移入品であり、高価なものであった。繰綿や総糸として必要な量だけ購入し、綿布を織っていた。南国と言っても、芭蕉布一枚で冬の寒さを凌ぐのは厳しく、暖かい木綿に憧れがあったことだろう。『わが奄美』でも、

注3：実綿は、綿花を摘み取った状態で種がついたままの繊維塊。繰綿は、実綿の種を取り除いたもの。篠卷は、綿打ちをして繊維をほぐし、方向を揃えて棒状に整えたもの。総糸は、篠卷になった繊維を紡いで糸にして総状にしたものである。さらに、総糸を染色して、織機にかける。綿打ちをして繊維をほぐしたものを繰綿と呼んでいた地域もある。

「奄美は木綿を作ったというが、湿度が高いので、それに適さなかったようである。その上、砂糖作りにおわれて、木綿作りは容易ではなかったという。冬でも粗<sup>アラ</sup>バシャ<sup>ヤシ</sup>衣<sup>注4</sup>をまとって過ごさねばならなかった。」<sup>13)</sup>

「木綿は、奄美では湿度が高いので作られなかったのだらうと思う。西郷隆盛が薩摩に願出た陳述書を見ても判然とする。綿百匁に対し砂糖三十斤という高価なものは、庶民にはとうてい着用できなかった。沖縄では明治二十六年でさえ、一般には木綿着用を禁じ、四季バショウ着用を命じたという。奄美は判然としないが、沖縄より早く、木綿は用いられたように思われる。」<sup>14)</sup>

とある。綿花栽培に適した気候ではないことが背景にあるとしても、薩摩藩による砂糖生産の強要、生活必需品が砂糖との交換制であったこと、その交換比率が著しく不利に設定されていたことなどの政治的な理由も大きいと思われる。

江戸時代の奄美の綿花生産量は明らかではないが、明治初期の綿花生産高の統計として『明治11年全国農産表』<sup>15)</sup>によると、実綿の生産量は、全国で89,218,909斤（1斤=600gとすると、53,531t）、大隅21,061斤（12.6t）（そのうち、大島郡6,395斤3.8t）、薩摩18,465斤（11.7t）となっている。綿花栽培が盛んであった河内は9,026,315斤（5,415t）、和泉は1,702,383斤（10,214t）である。奄美でも、統計に載る程度は栽培されていたことは確認できるが、非常に少なく自給自足にも満たない量である。

#### 4. 奄美の染織文化

江戸時代以前、身近な植物材料を用いて衣服を自給自足していたのは全国共通であるが、南島<sup>なつもの</sup>ならではの織物文化が育まれていた。『経済要録』巻之九、衣服第七の三段目には、

「夏布は薩州の上布より良は無し、抑々此の物は世上に薩摩上布と称すると雖も、薩州の産に非ず、其実は琉球国の織物にして、極上細布は佐伎島より出づ、又白上布は耶山<sup>やま</sup>、粗布<sup>げふ</sup>は宮古島より産する所なり、又芭蕉布は厄刺弗島<sup>えらふ</sup>の所産にして、種々精好なる阿紋<sup>あや</sup>を織り、極て美麗なる者多し、何れも最良の夏衣にして、他国の産に比すべき処に非ず、（中略）予彼地より産出する芭蕉布及び其他諸段匹を視るに、其間道の中に種々文理を織混じ、且蕉絲練り及び此を染る等の諸法、皆共に精粹を尽し、其巧妙なること絶て他州の及ぶ処に非ず、然れば予が先人の云はれたる如く、気候温熱の強きを以て、苦参・芭蕉・苧麻の類までも、此方の及ばざる極良の絲を生ずること必せり、且其細布と芭蕉布とを積<sup>ほそ</sup>して、絲を練り及び染たる様子を推察するに、共に年月人工を積累ね織成せる者なるが故に、数回此れを洗濯すると雖も、更に染色の変ずること無く、又其絲の腐敗すること最難し、（後略）」<sup>16)</sup>

とある。『経済要録』が著された1827（文政10）年には、すでに、薩摩からもたらされる上布や芭蕉布の品質が絶賛されている。また、それらが薩摩ではなく奄美群島や琉球で織られたものであることも明記されている。

『わが奄美』でも様々な染織文化が紹介されている。芭蕉、苧（からむし）<sup>注5</sup>、桐板（とんびゃん）<sup>注6</sup>、木綿など繊維の種類、草木染めに用いた植物と媒染剤の組み合わせ、紺や

注4：芭蕉の葉柄の外側の部分からとった太い糸を用いた芭蕉衣。

注5：イラクサ科の植物の茎からとった繊維で、苧麻（ちょま）とも呼ばれる。現在では、麻と総称される繊維の一種である。



縞などのデザインまで、自身の染織の経験を基に生き生きと描写されている。

明治以降の奄美の染織文化については、大島紬を抜きに語ることはできない。既に、多くの文献<sup>17)</sup>で様々な視点から考察されているので、改めてここで述べるまでもない。しかし、木綿の普及が遅れたことに言及しているものは少ない。本土では、江戸末期には木綿織物が零細な家内工業として成立し、「河内女の1匹織り」<sup>18)</sup>と言われるように、一日に木綿布1匹(2反)を織って一人前とされた。それ程の効率が求められたということであろうが、芭蕉や苧ではそのようなスピードは考えられないことである。手間をかけて糸をとり、織るという習慣が、後に、大島紬の美しい緋につながったと思われる。

## 5. 明治時代の奄美の衣生活

### 5-1. 『南島誌』にみる衣生活

『南島誌』は、1873(明治6)年10月に大蔵省の久野謙二郎氏が大島郡内を巡視し、当時の生活状況を著したものである。大島の衣生活について述べられている部分として、鹿児島県立図書館収蔵の写本の「大島 第四章 衣服飲食」を引用する。

「四時ノ衣服ハ民産ノ貧富ニ因テ様ナラス 先ツ富豪ヲ以テ之ヲ言ヘハ六月ヨリ九月迄帷子ヲ用ヒ九月下旬ヨリ十月迄単衣ヲ用ユ 十一月ヨリ十二月迄袷一月ヨリ二月迄綿入三月四月ハ袷五月ハ単衣ヲ用フルノ風習ナリ 然シテ上等の家産ト称スルモノ綿入ヲ所有スルモノ甚タ少シ 極寒ノ日ハ袷二三枚ノ上ニ外套ヲ著ク 此外套ハ綿入ニシテ其裁縫内地ノ者ト同一般ナリ 土人曰ク外套ハ皆之ヲ鹿児島ニ仰クト果シテ然ラン 唯貴尊ノ前ニ之ヲ用ヒス 下等ノ産ニ至リテハ袷ヲ所有スル者又少シ 極貧如キハ四時共ニ芭蕉ノ白衣一枚ヲ着スルニ至ル 夜衾ハ上等ノ家産アルモノ妻子ニ至ルマテ蒲団一枚ヲ充テ所有スヘシ 中等ハ三人ニシテ一枚 其下等ニ至リテハ七八人ニシテ一枚 最モ貧困ナルモノハ全戸所有ナキモノアリト云フ 島民其階級ニ因リテ礼服用ニ差違アリ 戸長副戸長及士族格其嫡子等都テ銀ノ菊形及ヒ銀ノ副指ヲ簪ト為ス者ハ朝衣 芭蕉ト緒トラ以テ是ヲ織ルモノニシテ其色黒ク光アリテ半襟長サ膝ニ及ホス 広帯 殆内地ノ女帯ノ如シ長サ一丈二尺計リ ヲ用フ 真鍮ノ「イチゴ」形ト真鍮ノ副指ヲ簪ト為ス 諸横目ハ広袖ノミニシテ朝衣ヲ許サス 筆子掟黍見廻リ真鍮菊先ト真鍮副指ヲ簪ト為ス者ハ中帯 内地ノ男帯ノ如シ長サ丈二尺計リ ヲ用フ 是皆年始及ヒ其他吉凶ニ依テ礼服用ヲ著スル制限ナリ 平民ハ別ニ礼服用ナシ 昨癸酉年鹿児島ヨリ令アリテ戸長ノミ紋服用フルヲ許可セリ 島民平常一般ノ服ハ広袖ニシテ半襟ノ長サ膝ニ至及ホス 袴ハトキトシテ馬上ニコレヲ用フ 外套ハ貴尊ノ前ニ之ヲ用ヒス」<sup>19)</sup>

衣がえの習慣として、6月～9月は帷子(苧または芭蕉の単衣を指すと思われるが、薄地で膝丈の夏用の着物ではないか)、9月下旬～10月は単衣、11月～12月は袷、1月～2月は綿入れ、3月～4月は袷、5月は単衣であった。しかし、衣服の所有実態は貧富の差によって大きく異なっていた。綿入れを所有する者は非常に少なく、極寒の時期は袷を重

注6：桐板(長田さんは、とウンジャンと表している)は、沖縄で用いられた白く透き通った高級な夏用織物である。中国福建省から原糸が輸入されていたが、第二次世界大戦により途絶えたため「幻の織物」と言われている。一般には、竜舌蘭から採った繊維ではないかとされてきたが、近年、中国産の苧麻であるとの研究結果が報告されている。『わが奄美』では、桐板が奄美に残っていたことや、竜舌蘭の葉を灰汁で煮て葉脈から繊維を採ったという経験も述べられている。しかし、竜舌蘭の繊維は硬く、衣服ではなく綱や綱として用いられたのではないかとと思われる。

ね着していた。さらに貧しい者は、年中芭蕉衣1枚で過ごさなければならなかった。蒲団も、3人に1枚程度あれば良い方で、家族で1枚あるいは所有していない場合もあった。木綿の綿が富裕層のものであり、貴重品であったことがうかがえる。

明治42年に鹿児島県大島々庁がまとめた『島治概要』において生活状況を著した節でも、

「本郡ハ気候温暖ニシテ厳冬ノ候ト雖モ霜雪ヲ見ス随テ農民ノ衣服ノ如キハ最モ簡易ニシテ単衣ノ重ネ着若クハ袴ヲ以テ冬季ヲ過スヲ例トス」<sup>20)</sup>

とある。

## 5-2. 郷土誌にみる衣生活

『宇検部落郷土誌』では、明治時代の衣生活について次のように記されている。

「近世になって木綿の着物が多く使用されるようになって次第にバシャギンも姿を消していった。それは、中国人と沖縄の商人が来て、カスリと木綿糸を売ったり、物々交換をしたりして、各家庭で着物にするため染めて織り着物にして着用するようになっていったことによる。」<sup>21)</sup>

『龍郷町誌 民俗編』では、

「昔のハタは地バタで、自分の腰に巻きつけて十四歳から三枚ほど織った。織り糸は経（たて）糸はバショウ、緯（ヨコ）糸は木綿糸であった。折節句のバシャギンは絹糸を混ぜて織り、日常着はバショウだけの「シロバシャギン」であった。バシャギンは二十五歳のころまで織った。バシャギンは破れやすかった。（益田民鶴氏・明治15年生・秋名）」<sup>22)</sup>

この証言者の益田民鶴さんは、織物名人として知られていた。1905（明治38）年頃に製作した花織（ハナウリ）の長着についての詳細な調査結果<sup>23)</sup>が報告されている。単純な地機で紋織を織るという現在では想像もつかない高度な技術を有していたことがわかる。花織は菱形の連続紋で、緯糸が表に浮き、経糸が裏に浮く両面浮織のことで、花浮織ともいう。通常の浮織では、裏面に糸が長く浮くため表裏の違いが大きい。花浮織では、表裏の区別がつきにくいいため、裏返しても使用できる。こちらの方が織物技法としては高度である。もともと、経緯とも芭蕉糸で織られたものであったが、芭蕉と木綿、木綿と絹というように変化していった。さらに、織機が高機へと変わり、日常着が木綿へと変わる中で、途絶えたものである。花織は高級品で、「打掛」の格と言われ、益田さんも花嫁衣装とした。『わが奄美』の中でも、先祖の残した最高の品として、生芭蕉の花織、生芭蕉の組織が紹介されている<sup>24)</sup>。

益田さんからの聞き取りによれば、芭蕉衣が衣生活の中心であったのは、おおよそ明治40年頃までだったと考えられる。明治40年は、大島紬の締機が考案され発展を遂げる時期でもあり、また、木綿が安価になっていた時期でもある。

『第11回勸業年報 明治25年』<sup>25)</sup>によると、1892（明治25）年における鹿児島県内の芭蕉布の生産高（おそらく、ほとんどが大島郡産であろう）は31,189反で、金額は27円25銭であり、1反あたり87銭である。

『名瀬市誌 下巻』によると、1908（明治41）年の名瀬における生産高<sup>26)</sup>は、大島紬が53,536反（390,896円）、綿布が6,200反（12,400円）、芭蕉布が6,464反（9,696円）であり、1反あたり大島紬7.3円、綿布2円、芭蕉布1.5円である。紬織業が大きく発展して大きな収入源となっていること、芭蕉布の生産が著しく減少していること、綿布との価格差がは

とんどなくなっていることがわかる。

### 5-3. 綿花の関税撤廃

明治維新後、鎖国が解かれると、木綿や木綿織物の輸入が増大する。明治初期には、木綿が代表的な輸入品であった。木綿類（繰綿、更紗、金巾、唐棧、綿繻子など）の輸入金額は、1868（明治元）年には総輸入額の39.5%、1874（明治7年）には43%にのぼった<sup>27)</sup>。衣服は生活必需品であり、少しでも美しく装いたいという気持ちはいつの時代も変わらない。また、服装の洋風化が進められ、官服や軍服などの需要が一気に高まったことにもよる。工業化を成し遂げた西欧の美しい織物や、繊維長が長く生産性の高い綿花の輸入によって、手紡ぎによる品質の一定しない国産綿糸は駆逐されていった。それに対して、品質の良い国産綿糸の供給を目指して紡績工場の操業が始まった。しかし、日本の在来種の綿花は繊維が太く短く、機械紡績や機械織りには適していないため、紡績・織物産業の育成の障害となっていた。

『第5回勸業年報 明治18年』における明治18年12月の鹿児島市の「都邑物価表」<sup>28)</sup>によると、繰綿（和産）：100斤（60kg）19円60銭、繰綿（洋産）：数値記載なし、木綿晒：1反19銭、綿糸（和産）：100斤29円、綿糸（洋産）：100斤26円90銭となっている。さらに、1888（明治21）年の綿花輸入関税は、実綿は原価の5分、繰綿は100斤につき重量税39銭8厘（100斤につき35銭）であった。日本に輸入され関税がかかる前の段階で、インド綿は100斤で17円、中国綿は19円であった。内地綿は20円以上と記されていることから、日本の紡績業が外国と競争するために関税の撤廃が求められ、1896（明治29）年4月「輸入綿花及羊毛海関税免除法」が施行された<sup>29)</sup>。当然、綿作農民の大きな反対があったが、農業よりも紡績業の発展が優先された。輸入した安価な綿花を加工して、綿糸あるいは綿織物を輸出する加工貿易による立国を目指した政策だった。

綿花関税撤廃により、安価なインド綿や中国綿が大量に輸入され、1907（明治40）年になると、全国的に綿花栽培は激減した。『本邦綿糸紡績史 第一巻』によると、

「手紡績は明治初年までは全国農家の子女の内職として盛に行はれ、本業の餘日真暇を以て紡車を繰り其製絲を認にして市場に賈捌いたものである。手紡績を以て一家の産業とし生計を立てたのではない。然るに外國綿糸の輸入されるに従て漸次之に厭倒せられて其姿を薄くし、明治二十年後に至て全く絶滅した。即ち我農家子女の餘業たる紡績賃仕事は根底より破壊せられ、我國民は皆他國の原料及工賃で其身體を包まねばならぬことになった。我機械紡績業が勃然として興起するに至つたのも、一方から見れば右顯象に刺戟せられた爲めである。

手織業は糸車に後れて今尚ほ田舎に若干の餘喘を保つて居る。原因は縞、緋等複雑の織模様と織耳が専ら邦人の嗜好から離脱されぬ爲めである。婦女子が業閑を利用して織賃なしの布を得んが爲でもある。」<sup>30)</sup>

綿花栽培や手紡ぎは姿を消し、かろうじて機織りだけが残った。織賃分の手間をいとわない勤勉さ、外国にはない日本の縞や緋への思い、自分や家族のために少しでも美しいものを織りたいという意識によるものではないだろうか。奄美においてもこの流れは例外ではなく、冒頭の『わが奄美』の記述につながっているのである。染色も織りもデザインも自分の手で行うことにより、限りなく工夫ができる。手持ちの糸をうまく組み合わせ、仕事着として、外出着として、子どもの着物として、用途に応じて作り分ける。生活のため

の労働でありながら、創造性や個性を発揮することができる。出来上がった着物を着用することによって、その成果が人目に触れ、織物上手として評判になる。社会的に評価されることがなかった女性達にとって、大きな喜びであっただろう。

## 6. 奄美に残された芭蕉布

平成21年度かごしま文化芸術活性化事業として、「奄美芭蕉布再生プロジェクト」が実施された。活動の一環として、奄美大島内に保存されている芭蕉衣の調査<sup>31)</sup> および展示が行われた。旧家で受け継がれているものだけでなく、博物館や資料館に寄贈され収蔵されているものも多い。どれも現在では復元することが困難な貴重な資料である。ただ、身近なものだっただけに、詳しい記録がなく、製作年代などを特定するのが難しい。経糸、寸法、縫製方法などから明治時代に製作されたと推測されるものの中から、特徴のある織物をいくつか紹介したい。

写真3：奄美市立歴史民俗資料館に収蔵されている芭蕉衣である。典型的な無地の芭蕉布で、経糸・緯糸ともに芭蕉で、織密度は粗い。木綿糸で縫製されている。製作年は不明であるが、手ぬぐいの肩あて、共布の居敷当がつき、寸法は本土式の標準に近いことから、明治末以降のものであると思われる。

写真4－1および4－2：奄美市住用公民館に収蔵されている芭蕉衣である。2010年10月25日の水害で浸水し、一時的に奄美博物館に疎開していた。芭蕉衣とされているが、経糸は木綿、緯糸は芭蕉である。経糸は太さが均一な綿糸（機械紡績によるものだろう）で、生成り4本とサーモンピンク4本の繰り返しで、芭蕉布らしい縞柄となっている。かなり着こまれた様子がみられ、綿糸の傷みが目立つが、芭蕉糸は傷みがなく丈夫なことがわかる。

写真5－1および5－2：奄美市立歴史民俗資料館に収蔵されている芭蕉衣である。1979（昭和54）年に前田ウミさんから寄贈されたものである。経糸・緯糸ともに地糸は芭蕉で、緋糸は木綿である。経糸は芭蕉13本と緋糸1本、緯糸は緋糸1本・芭蕉糸5本・緋糸2本・芭蕉糸5本の繰り返しである。緋糸のみに綿糸を使用し、細かい緋柄を出していることから、木綿が貴重だった時代のものかもしれない。

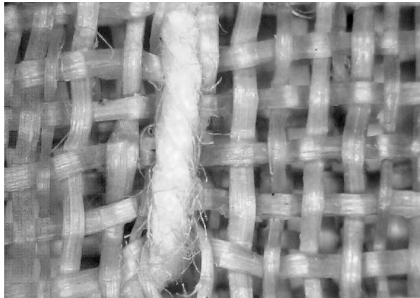
写真6－1および6－2：奄美市立歴史民俗資料館に収蔵されている芭蕉衣である。1972（昭和47）年に良武八さんから寄贈されたもので、母ウラさんが1893（明治26）年に大島産の藍で染めたものであるとされている。経糸は、藍の綿糸3本と白の絹糸1本（ガス糸使用と表記されているが、撚りがないことから絹ではないかと思われる。さらに詳しい鑑定が必要である）、緯糸は芭蕉である。非常に深い藍色で、白の絹糸の美しさが映える。

写真7－1および7－2：奄美市立歴史民俗資料館に収蔵されている芭蕉衣である。経糸は、白1本・藍1本・白1本・藍4本・紫2本・茶1本・白1本・紫1本・藍4本の繰り返しのストライプで、藍染の糸は木綿、その他の色は絹である（ただし、これも、ガス糸と表記されている）。緯糸は芭蕉である。肉眼ではわかりにくいですが、白の経糸に茶の経糸が添えてあり、表情のある縞柄となっている。

写真8－1および8－2：奄美市立歴史民俗資料館に収蔵されている緋の芭蕉衣。1972（昭和47）年に里見当助さんから収集したものである。芭蕉衣とされているが、糸が細く、撚りつなぎであることから、苧ではないかと思われる。ただし、奄美では、芭蕉も撚りつ

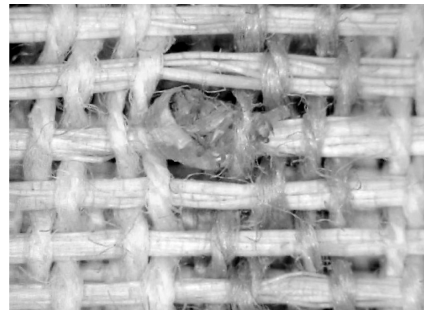
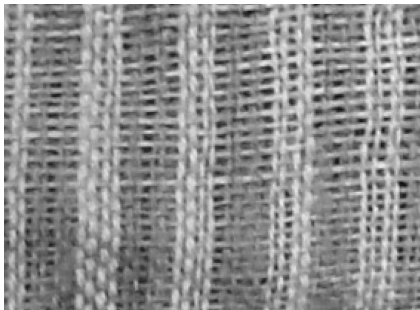


なぎをしていたという説もあり，鑑定が必要である。紺のように見えるが，裏面は色が薄く，型染めの捺染である。芭蕉であれば，芭蕉の型染めは珍しいが，古い着物を染め変えたとも考えられる。



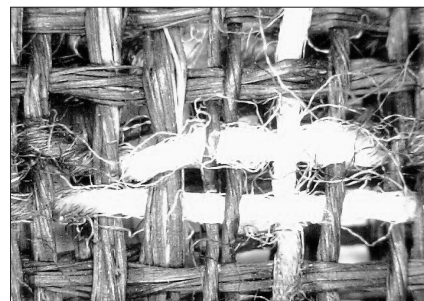
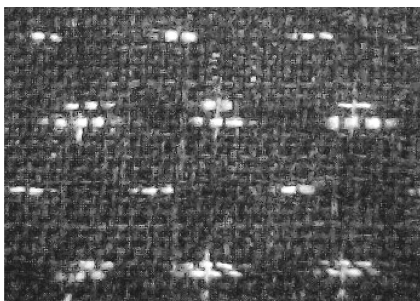
1 mm

写真3 芭蕉布（奄美市立歴史民俗資料館蔵）



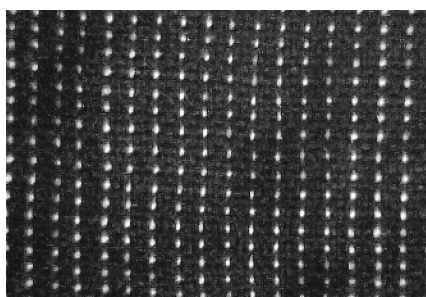
1 mm

写真4－1（左）および写真4－2（右） 経縞芭蕉交織布（奄美市住用公民館蔵）



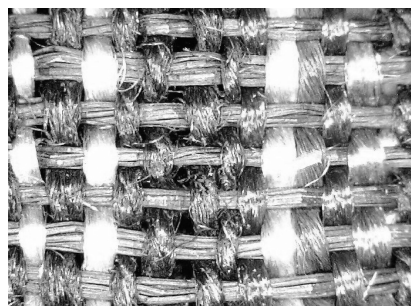
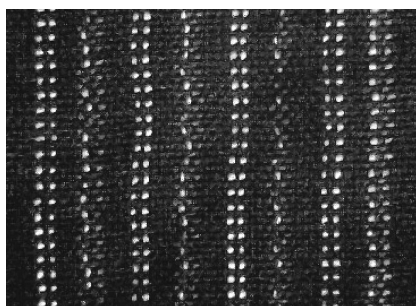
1 mm

写真5－1（左）および写真5－2（右） 緯縞芭蕉交織布（奄美市立歴史民俗資料館蔵）



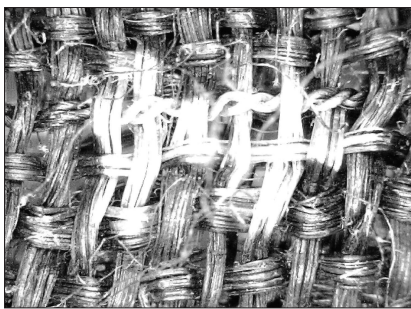
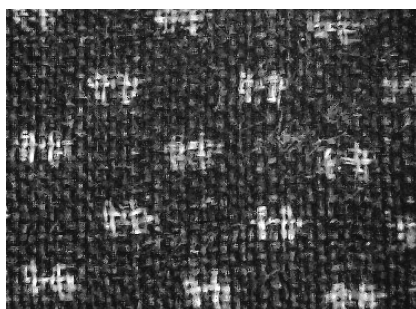
0.3 mm

写真6－1（左）および写真6－2（右） 芭蕉交織布（奄美市立歴史民俗資料館蔵）



1 mm

写真7－1（左）および写真7－2（右） 経縞芭蕉交織布（奄美市立歴史民俗資料館蔵）



1 mm

写真8－1（左）および写真8－2（右） 捺染芭蕉布（奄美市立歴史民俗資料館蔵）

様々な資料を見たが、ひとつとして同じ組織、縞柄、縹柄はない。現在の常識からは思いつかない材料の組み合わせもある。木綿が貴重であった時代には、木綿を使った着物を着ることがステータスであり、少しでも木綿を使おうと試みただろう。「奄美芭蕉再生プロジェクト」実行委員長である内山初美さんのコレクションには、京都に染めに出したという花柄の芭蕉布もあった。わざわざ京都に染めに出すという手間と経費がおしゃれの証であり、そのような贅沢をする余裕が生まれていたことも示唆している。これは、奄美だけではなく、沖縄でも同じような経過を辿ったのではないかと推測される。

2011年11月に沖縄県立図書館で『琉球染織』を閲覧し、本報の織物の拡大写真との比較を試みた。『琉球染織』は「東恩納寛惇（ひがしおんな かんじゅん）文庫」に収められている染織裂地帖4冊で、219点の端切れ標本が貼付されている。沖縄の染織文化を知る上で貴重な資料である。誰がいつ収集したものであるのか特定されていないが、1935（昭和10）年頃に那覇で収集されたものとされている。同館の貴重資料デジタル書庫（<http://archive.library.pref.okinawa.jp>）でも公開されている。紅型51点のほか、多様な縞、格子、縹があり、締機の大島紬とされているものもある。

貼付されている織物の繊維組成をみると、木綿、絹、芭蕉、桐板、苧麻、ラミーの6種が用いられている。綿織物96、絹織物36、芭蕉15、苧麻10、ラミー1の他、交織が46ある。交織の繊維組成として、木綿+桐板、芭蕉+桐板、木綿+芭蕉、木綿+絹、芭蕉+絹、木綿+苧麻、絹+桐板、苧麻+ラミー、木綿+芭蕉+桐板、木綿+芭蕉+苧麻、木綿+芭蕉+絹、木綿+桐板+苧麻、木綿+絹+芭蕉+桐板の組み合わせが見られ、非常に多様である。

当時、一般的に用いられていた素材の割合や色柄の傾向をそのまま反映しているものではなく、庶民の普段着や仕事着はもっと素朴なものであったと思われる。それでも、材料や意匠の工夫は、明治時代の奄美の染織文化を考察するための参考となるだろう。

## 7. まとめ

明治時代に奄美の生活を調査した報告書の類では、厳しい生活状況を一段下にみた記述もある。しかし、長田さんの著作では、豊かな生活文化が描かれている。本報では、染織文化、その中でも芭蕉と木綿に限定して考察したにすぎない。奄美と言えば、大島紬だけが突出して語られるが、産業としてではなく生活の側面から見ると、織物は、生活技術、生活デザイン、家庭経済などを包含する総合的な文化である。染色・機織り・裁縫の技術を身につけ、入手できる材料とその組み合わせを工夫し、家族のためにどんな着物がいつ何枚必要かという家庭経営の視点をもって、少しでも美しいものを作って着せたい（着たい）という思いが、ひとつとして同じものが無い縞や縹を生み出してきたと思われる。

長田さんの民俗研究を足がかりに、奄美の染織文化の再評価が進むことを期待している。奄美群島内の資料館や公民館には貴重な資料が残されているが、その多くは、製作年代や繊維組成などの基本的情報も不明なままである。調査・研究が進めば、沖縄の『琉球染織』に匹敵する貴重な資料になると思われる。

## 謝 辞

貴重な資料を撮影させていただいた奄美市立奄美博物館、奄美市立歴史民俗資料館、大和村中央公民館および「奄美芭蕉再生プロジェクト」実行委員長の内山初美さんに感謝

の意を表します。

## 文 献

- 1) 長田須磨：『奄美随想 わが奄美（南島叢書85）』，海風社，p.247（2004年）
- 2) 柳田國男：『柳田國男集 第1巻』，筑摩書房，p.217-379（1968年）
- 3) 長田須磨：『奄美女性誌』，農山漁村文化協会（1978年）
- 4) 長田須磨，須山奈保子，藤井美佐子：『奄美方言分類辞典（上）』，笠間書院（1977年）  
および『奄美方言分類辞典（下）』，笠間書院（1980年）
- 5) 長田須磨：『奄美の生活とむかし話』，小峰書店（1984年）
- 6) 杉藤美代子：『長田須磨の奄美の民話と昔がたり－奄美大島大和浜方言の記録－』，琉球大学琉球列島班文部省重点領域研究成果報告書（1990年）
- 7) 鹿児島県教育委員会：『鹿児島県文化財調査報告書第52集』，p.70-76（2006年）
- 8) 永原慶二：『苧麻・絹・木綿の社会史』，吉川弘文館，p.212（2004年）
- 9) 喜多川守貞，朝倉治彦・柏川修一（校訂）『守貞謄稿 第三巻』，東京堂出版，p.100（1992年）
- 10) 佐藤信淵（滝本誠一校訂）：『経済要録』，岩波書店，p.141-142（1928年）
- 11) 武部善人：『綿と木綿の歴史』，御茶ノ水書房，p.173（1998年）
- 12) 横川公子：『服飾を生きる 文化のコンテクスト』，化学同人，p.40（1999年）
- 13) 1)と同じ，p.184
- 14) 1)と同じ，p.192
- 15) 農商務省農務局：『明治11年全国農産表』 p. 1 - 5，p.294-302（1880年）
- 16) 10)と同じ，p.142-143
- 17) 例えば，横山正敏他『大島紬の研究－経済・科学・デザイン－』鹿児島県立短期大学地域研究所（1986年）など
- 18) 11)と同じ，p.155
- 19) 久野謙二郎：『南島誌』，p.21-22（1874年）
- 20) 鹿児島県大島々庁：『島治概要』，p.15（1912年）
- 21) 宇検部落郷土誌編集委員会：『宇検部落郷土誌』，p.315（1996年）
- 22) 龍郷町誌編さん委員会：『龍郷町誌 民俗編』，p.652（1988年）
- 23) 17)と同じ，p.208-213
- 24) 1)と同じ，p.175
- 25) 鹿児島県農商務課：『第11回勸業年報 明治25年』，p.173（1874年）
- 26) 名瀬市誌編纂委員会：『名瀬市誌 下巻』 p.53（1973年）
- 27) 11)と同じ，p.204
- 28) 鹿児島県農商務課：『第5回勸業年報 明治18年』，p.141（1886年）
- 29) 11)と同じ，p.261-263
- 30) 絹川太一：『本邦綿絲紡績史 第一巻』，日本綿業倶楽部，p. 8（1937年）
- 31) 奄美芭蕉布再生プロジェクト実行委員会：『奄美芭蕉布再生プロジェクト報告書』，p. 5 - 8（2010年）